

子母澤寬

勝海舟
第二卷

咸臨丸渡米

新潮社版

勝海舟 第二卷・咸臨丸渡米

昭和四十年一月二十六日印刷

昭和四十年一月三十一日発行

著者 子母澤 寛

発行者 佐藤 亮一

印刷所 三晃印刷株式会社

製本 新宿加藤製本所

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話東京(260)一一一一(代)

振替東京八〇八番

定価 四三〇円

凡丁本はお取りかえいたします

勝
海
舟

第二卷・咸臨丸渡米

日本丸

阿部伊勢守は、今でいう肝臓硬結だ。それを漢方の侍医が痞癥と診立てて、手を尽くしていたが、いつこう、はかばかしく行かない。阿部さんも、所詮は長からぬ命と諦めてか、その病を押して、時々柳營へ出て来る。次から次と眉へ火のつくような外交の問題は、この病篤い宰相を安らかに臥せておいては呉れないのだ。あのにこやかな豊かな風貌の人がひよろひよろして幽霊のようにさえ見えるを、家来たちは、いつも泣きながら送ったし、柳營の中でも、思わず涙を拭う人もあった。

三十二万石の越前侯松平春岳さんが、久しぶりで、阿部さんに逢って、その痛々しく憔悴したを見て、はっと面を伏せられた。ずいぶん御大切に、そういつて、その日は別れたが、次の朝早々、自分の侍医で蘭医の名手半井仲庵を、お見舞として、阿部邸へ差遣わした。半井が診ると、病軀ではない、肝臓だ。

春岳さんは、仲庵の戻るを待っていた。どうじゃ、そうきかれたが、仲庵は、口惜しゅうございますが最早やお手

遅れに相成りましたと、低い声で答えた。春岳さんは、そうか、もういかぬか、さてさて惜しい人を、惜しい時に失うものだといって、思わずほっと、吐息した。

その阿部さんの死んだのは六月十七日。二十五歳で寺社奉行から老中になられて、ことしが三十九。本当はこれからというところであった。

この知らせは、直ぐに急使で長崎へも来た。そして、老中末座の下総佐倉の堀田備中守正睦が筆頭老中として御政治を取られるとの情報をも持って来た。

伊沢美作守でも、大久保右近将監でも、岩瀬修理でも、永井玄蕃頭でも、阿部さんの機嫌に叶って世に出た人達だ。こんな人が他にもたんとある。早い話が、目下の杉純道だつて然様と云えば云えない事もない訳で、自然、麟太郎も、なにかしら引つかかりがあるような氣持がする。

「なんだかだと云っても十五年の御老中だ、その間大過なくやってのけたのは、並の人じゃなかったねえ」

麟太郎は、本蓮寺の居間に、引っくり返って、団扇を使いながら、丁度来ていた伴鉄太郎と中島三郎助を対手にしていた。

「その十五年もお勤めをなさるだけに、あちらにも好く、こちらにもよくというところがあるやに聞いていました」

中島がいった。

「そうだよ。それで無くちやあ十五年は持たねえよ。態度がいつも煮切らない、どうも少し暖昧といえはいえよう。

あの人がせめて天保の水野越前守程の養度胸があり、大見識に徹していたらと、おいらあいつもじりじりしてたが——え、だが、あの入心は大の開国進取だよ。それをそっちにもこっちにも遠慮をしいしい政治を執る故、いつもいつも、おのが縄でおのが五体^{からだ}をしばるようなことにはばかりなつて来る。おいらあね、政治でもなんでも、一人残らず敵になつてくれなくちやあ、思うような仕事あ出来ねえと考へてゐる。こつちに赤誠というせえあれあ、そ奴が何よりの相棒だよ。みんなによく思われ、惚れられて、なにが出来るえ」

麟太郎は、むくむくと起き上つた。

*

金之助のからだは、依然良くない。が、阿部さんが死んだというをきいて、冥土でわたしの号令教導でも見ていたどうかなどと冗談をいった。それが如何にも空々しく拵えているようなのを感じると、この頃、気が弱くて、死ぬのが恐ろしくて、自分で自分の心をどうする事も出来ずにいる金之助というものがわかつて来ているだけに、中島にも、ほんとうに可哀そうで堪らない。

麟太郎が、然様云つて、木村さんから江戸の松平安房守へ、金之助の病状を知らせてやつたから、近い中に、きつと見舞に来るだろう。

出島の阿蘭陀屋敷の、門を入つた左側は広々とした花畑に拵えてあつたが、この頃は、その花が一ぱい咲いて、紅だの黄だの紫だの、余り綺麗なもののだから、ベルスライケン大尉にたのんで、金之助は、熱のない氣持のいい日には中島につれられて、この花畑の中を散歩する事を許して貰つてゐた。これが金之助を大そう喜ばせ、いつもいつもここへ行つた。

杉から麟太郎へ手紙が来た。阿部さんに死なれて、実に落胆したことや、実は、伊沢美作守と相談して、わたしは米利堅へ行く氣でいた、一氣に米利堅といつても許されまいから先ず爪哇^{ジャバ}へ行くといつて出發する事に相談が出来て、これには岩瀬さんも是非一緒に行くといふので、内々阿部さんに願つて見たところが、機を見て行くがいい、費用は出してやるとの仰せであつたのが、実に今度の事で呆然自失したという。

手紙を見ながら、杉奴、おいらと同じ事を考へてゐやがつたわ、人間の考などというものは、みんな同じようなものだ、と、にやにや笑つて終つた。

その端に、きのうは、お夢ちゃんと二人で、久保町の原

つばに、轆轤首ろくろくびの女の見世物を見に行った、覗きからくりのような箱の中を暗くして目がねの穴からこれをのぞく、馬鹿々々しいいかもの知りながら大そうな見物だったと、小さな字で書いてあった。お夢はいいが、杉が子もだいぶ大きくなったろう、唐人玩具でも買って送ってやろう。麟太郎は、そんな事をつぶやいた。

去年の夏から、豆州下田の港には、サン・ジャシント号という船で、米利堅国の総領事波理須ペリスがやって来ている。しかし幕府も、この前の彼理の時のように腰がぬける程驚きあわてていないが、然りとて、別に喜ぶでもなかった。品川に連珠砲堡が出来ていたし、大阪にも、紀州にも、淡路にも、砲台が出来て、幾分気休めの気持もあったが、一方では、外国の事情も少しずつわかりかけて来ているので、それが却ってどっちつかず、この前とは、気持は違うが、要するに幕府もただその日その日を事無く過ごそう腹だけである。

が、伝習生たちは、今のところ、そうした世の中に超然として、ただ、一生懸命に勉強をせよというのが木村さんの方針だ。元より麟太郎もそ奴は賛成である。

今日は金之助が大そう元氣だ。

ここところ四日も五日も、熱というは無く、物を食べたい気持も動いて、なにかしら、じっとお寺にいるもいや

だから、またお花畑へ行くといふので、中島が手をとるようにして出かけて行った。金之助は白い緋ひの単衣で瘦せた肩の辺りが淋しそうだ。

*

風もなし、花の香気で一ぱいで蝶々がひらひら飛んでいる。阿蘭陀花の一つ一つは美しく、いつ迄見ても飽きない。ずいぶん長い事、それを見ていた。金之助は笑いがら、飛んでいる蝶々を抑えようとして追った。

「止せ止せ、そんなにからだを動かしてはいけないよ」

中島がいうと、素直にそれを止めて、花畑を廻ると、ずつと阿蘭陀屋敷の裏の方へ行った。そのの畳み上げた石垣の上へしゃがんでみると、長崎の港が一目に見渡せる。右に稲佐つづきの山々、左は大浦から鍋冠なべかぶの山つづき。いいなあ、金之助は、本當にうれしそうににこにこした。

おや？ 不意にそういつて、しゃがんでいた中島が立上った。眼は瞬きもせず、鍋冠山の裾から大浦への一本道を見ている。青い山の裾を、帯を引いたような広い道。其処を土煙をたてて、馬が一頭、疾風のように飛んで来る。

「あれあ、どうやら南の見張番所からの役所への早知らせのようだが」

金之助も、立って、その馬を見てから、直ぐに、眼を港

の鼻へ転じた。が、別に変ったものも見えなかった。

「とにかく、わたしは、伝習所へ行って見よう。あんたは一人で大丈夫かな」

「まだまだ足元はしっかりしているよ。わたしも後から行くが」

「いいや、わたしが引返して来るまで、此処にいて下さい」

中島は、もう走り出していった。

「おお、あれだ」

金之助は、思わず、沖を指さした。白帆の異国船が三艘、静かに、悠々と今、神崎の鼻の沖をこっちへ来る。

金之助が、静かに伝習所へやって来た時は、もう麟太郎も出て来ていたし、木村さんも蘭人教官達もみんな遠眼鏡で沖を見ていた。ベルスライケン大尉は、真ん中の三本櫓が日本丸であらう、一艘は商船、一艘は運送船のようだと麟太郎へいった。

麟太郎は、うなずいて、ひょいと眼鏡をはずした時に、ふと、そこにいる金之助を見た。びっくりして、おう、いけねえよこんなところへ出て来ちゃあ、世の中を忘れろ、隠居した気でじっとしていると、あれ程云つてあるじゃあねえかえ。

は。お花畑まで参ったものですから。

お帰りよ、おかえりよ、お前さんに、娑婆の風あ毒だよ。

麟太郎は、すぐに水先案内の小舟を幾艘か出した。中島さん、お前さんも行っておくれ、お前さん浦賀以来、異国船に第一に行くに縁があるわさ。

伴も、佐藤も、中島も、出て行った。佐賀藩居残りの、佐野栄寿左衛門も同藩の人達をのせ、鍋島さんの印物をひらめかせた自藩の船を出して行った。

如何にも着いたは日本丸。幕府から阿蘭陀への御詔軍艦二艘の中の一つだ。阿蘭陀カンテルク市で一年で作った一段砲装の三等艦、蒸汽螺旋仕掛の木造である。もう一艘は商船アンナ・ジグナ号。一艘は後に佐賀で買入れた輸送船飛雲丸である。

*

ベルスライケン大尉たちと交代する新しい教官がこの日本丸でやって来た。指揮役が、カッテンディーキ大尉、軍人らしくない色の白い何処となくおしゃれな人だ。ファン・トロイエン中尉、ハラウイグルス少尉。機関方のハルデスは丸々に肥った愛嬌のある奴だ。騎兵教授役も来たり、活版工も来た。この頃長崎には、もう活版というが出来ていた。長崎目付の岡部駿河守が阿蘭陀屋敷にあった活版器械を買って、立山の奉行所へ仮小屋を建ててこれを据え、ここを活字版摺立所と称して、夫々の役人も定め、蘭文法

セイタキシスを印刷したり、鉛で活字を捨えることも覚えていた。活版工の来たは、こちらから頼んだからだ。

麟太郎が、長照寺の金之助のところへやって来た。

「今度来たボンベという奴あ、ほん物の医者だわき。今迄出島にいた奴あ、段々きいて見ると、本当の医者じゃあねえそうだ。まあ医者^の書生だ。おいら、早速ボンベに逢つて、お前がことを頼んだところ、番所の許しが出次第、直ぐにも行つてやると云つていたよ、いい奴らしい」

その番所にも、直ぐに許しを出すよう云つてきたから今夜、暗くならねえ中に来るだろう。

「は、すみません」

金之助は力のない声であつた。どんな名医に診て貰つたところで所詮助からないことだろうというようなものが、その僅かな言葉の中に溢れてはいるが、しかし今度来るボンベファンメイドルフォールドは阿蘭陀海軍の軍医でなかなか出来る、いつかお花畑で、ペルスライケン大尉からきいたことがある。その新しい医者が、この自分の病氣をどんな風に扱ってくれるか、そう思うと、絶望の中にも一縷の綱^{ちり}がつながっているようなものを覚えて、少し心が勇み立つた。

麟太郎もにつこりした。今迄の医者が本物でないなどは嘘だ。がそういつてそれをけなして、今度のボンベへ希望

を持たせてやろうとしたのだ。

留守だった中島がかえつて来た。そして、ペルスライケン大尉が、伝習所であなたを待っていると伝言をして呉れるようと頼まれて来たという。

「じゃあ、後で、ボンベが来る時に、また、おいらが来てやるよ」

そういつて、一先ず麟太郎はかえつて行つた。

ほんとに大尉は、待つていた。そして、麟太郎を見るといきなり、手をにぎつて、

「勝さん、いよいよ来月十六日、ジグナ号で、国へかえる事になりましたよ。あなたとも、もう、お目にかかる日が幾日もない」

「そうですか。十六日に定まりましたか」

「定りました。いよいよお別れです。しかし後任のカッテンデーキ大尉はなかなかの学者です。こちらの学問の進みにつれてどのようにでも導いてくれます。それにトロイエン中尉は、砲台築城の事について詳しい人だから、わたしが何時までいるよりは、あなたの方の爲めになる。ただ、わたしの心配するは、大尉は、非常に厳格です。いや厳格というよりは峻厳^{そんげん}というべきだろう、誰にでも仮借するところなく痛罵を加える。それがこの日本に於ては、飛んだ事態を惹起^{きき}こしはしまいかと、案じられましてね。それで

わたしは、あなたに逢いたかったのですよ」

*

いや厳しいは却っていいでんしょう。あなたが余り優しくされるから、伝習生は親とも兄とも思つて万事に少し甘える風がある。この辺でびしりと一鞭呉れて貰うは、ほんに薬になりましょう。大尉はにこにこしながら、
「わたし、お別れの言葉を残して行く。勝さん、あなたよく記憶していて下さい」

そういつて、ね、伝習生の一番いけないことは著しく不規律だという事です。陸上のものよりは海上のものはいっそ規律を厳しくしなくてはならないものなのです、わたしは、それをずいぶん説いたが、多くは用いられなかった。

麟太郎は頭をかいて、全く、全く、といった。

「勤務中、厳格な規則に従うといふことの出来ないのは、日本人の観念と生活の様式がいけないのです。勝さん、あなたは、将来の日本国のために、是非、これは改めなくてはいいけません」

「必ず忘れません」

「それから一つ、これは他の総ての事よりも、一番大切な事です、日本人は、経済という事を知らない、経済観念というものが、まるで無いといつていい。ね勝さん、海

軍は金がかかる、海軍の経営には先ず、経済という事を知らなくてはならない」

「経済、経済」

麟太郎は低く呟きながら首を振った。

「あなたならば、心さえそこへ注げば直ぐわかつて来るでしょう。あなたが経済というを知るのは、日本の諺の所謂鬼に金棒だ」

大尉は、そういつてから、暫くじつとしていたが、

「残り惜しい。わたしは、本当に残り惜しい」

と、半ばひとり言のようにいつた。

「わたし共も同じ事。親に別れるような氣持がしているのです。伝習生たちの、あなたのお顔を見る眼によつて、あなたは、わたし共の心を見ていてくれるでしょう」

大尉はうなずいた。そしてまた思いついたように、勝さん、と呼んで、

「われわれの今迄やつた学問は、学問の中のほんの一小部分でした。国を泰きに置き、すべての人々の幸福を進める為めには、まだまだ沢山のいろいろな学問をしなくてはなりません。ね、勝さん、来て下さい是非阿蘭陀へ」

麟太郎は、うなずいた。

「是非参ります」

「わたしは、あなたを、わたしの船で一緒にお連れ出来ぬ

のを残念に思う」

話がそこで途切れた。麟太郎はふと、思い出して、実は今夕ポンペ軍医に、松平金之助を診て貰う事におたのみしてあるが如何なものでしょうときいた。おお、それは必ず行くでしょう。わたしは、急に思い立って、あなたへ話に來たが、それでは、これからすぐ帰って、あの人にそれを話します。

ポンペ軍医が金之助を診て出島へ戻るに随いて、麟太郎の長照寺を出たはもう真つ暗になってからであつた。

どうでしょう。

いけません。後百日とは生きられないでしょう。

軍医は氣の毒そうに云つた。

*

十六日の暁は、まるで瑠璃を張つたような秋晴れた。港も澄み切つて、山々がその中に浮んで見える。

伝習所は、まだ陽の出ぬ中から大さわざであつた。

今日はいよいよ二年半の間お世話になつた阿蘭陀教官が、一人残らず国へかえられるのだ。

ペルスライケン大尉は、ほの暗い中に、長照寺へ金之助を見舞つて、最後の別れを惜しんでくれた。この二三日、ちよいと病体が悪かったが、大尉を見ると、無理にも起きようとしたのを押えるようにして、わたしは国で、あなた

が軍艦を運転してあちらへ來られる日を待っていますよといつてくれた。臉がうるんでいた。ポンペ軍医から、みんな聞いているのだろう。

しかし、いい事は、丁度この前日江戸から父の松平安房守が着いたことで、父子はなんとも云えない表情で、大尉の去るのを送つた。

商船アンナ・ジグナ号が、港の真ん中に、阿蘭陀の国旗をはためかせて錨を下している。伝習生たちの小船は、その船の周囲を取巻き、教官たちは、みんな甲板に出て、その小船へ話しかけている。中にも、大尉の立っているすぐ下には、その小船が幾艘も幾艘も群がっていた。

一艘に、麟太郎がのっている。

「御健康を祈ります」

「あなたも」

と大尉は、挙手をしながら、

「是非阿蘭陀へ來て下さい。わたしはそれを信じます」と強い声でいった。

先月着いたばかりの日本丸は、カッテンデトキ大尉以下の新教官と、阿蘭陀通商事務官クルチス氏、それに木村さんや岡部駿河守などが乗つて、ジグナ号の近くにいた。

時刻が來た。日本丸は、先ず、別離の意を告げて、どどんと、大砲の第一發を發した。小舟の人も、ジグナ号の

人達も、一瞬、不思議な興奮を感じた。と共に、船という船は、一艘残らず、静かに動き出したのである。

一発、二発、三発。日本丸九発の砲声は、海も裂けよと、轟き渡った。中島三郎助の小舟は、ジグナのすぐ舳先をすべって港の外へ先導した。

港を出るとすぐ、小舟は頻りに歓呼の声をあげながら、船を見送って引かえした。大尉は、甲板の一段高いところに立って、頻りに白帛ジグナを打ふりながら、麟太郎の姿の見えなくなる迄、これを見ている。小舟はまるで強い力にでも引かれるように、後へ後へと去った。麟太郎は、突立って、片手を高く挙げていた。

日本丸だけが、伊王鼻おうばなまで、ジグナを見送って、五島の島々をはるかに見て、ここで静かに、運転を停め、ジグナに別れた。

ジグナは、白い帆を張って、舳先に白い波を切って行く。鷗がむれて、何処までも何処までもこれを追う。

次の日、元よりみんな伝習所へやって来たが、なんとなく、齒の抜けたような淋しさを感じるようであった。

*

ペルスライケン大尉のいった通り、新教官長のカッテンデーク大尉は、如何にも峻厳だ。峻厳というよりも、その顔や姿に似ず言葉になんとかなく毒があつて、江戸人には、

妙にからみやがるとより思われないところがある。自から運用学を受持つているが、専任の通詞岩瀬弥七郎などは、時々、糞味噌に叱り飛ばされているを、麟太郎は、気の毒に思つた。

江戸から、寄合医師松本良甫の総領良順がやって来た。ボンベ軍医について、医学を勉強が目的だ。ほんととは下総佐倉の藩医佐藤泰然のせがれ。まだ十九だがなかなか出来る人間だ。それに前後して幕臣ばかりが二十五人、それに各藩のものも大勢来た。幕府も各藩も、今度はいろいろ考えて、著書調所勤番の斎藤源蔵は、含密くわみつ学を、小姓組の久保紀之助、書院番組の小笠原鐘次郎、倉橋育之助は西洋騎兵学を、という風に、各、研究の題目を持ってやって来た。長崎通詞のせがれ本木昌造は、ケインドルマウンについて、ひたすら活版印刷を学ぶ事となる。

ボンベ軍医は主として出島の居宅で、医学を教えた。今日も松本は、そこへ行つての戻り、橋を渡って来るところで、ふと、麟太郎と逢つた。

「おい、お前さんよく見舞つてくれるそうだが、金之助の病氣は近頃はどうか」

「は。だいぶ元氣はついています、結局は、お氣の毒を待つているというのが本当です」

「医者が、そんな事じゃあいけねえよ。へん、そんなもの

を待たれて堪るかえ。無理にも助けようとしなくちゃあいけねえわさ」

「やつては居ります。が、いくら医学の力でも、人間の寿命にはかなわぬものと思います」

「ふん。お前、その若さで、そんなべら棒を云っちゃあいけねえ。そ奴あ坊主のいう事だ。助ける、助けて見る、生きる奴を生かし、死ぬ奴を死なせるじゃあ、医師あいられえよ」

半分冗談にそういつて、どんどん山の方へ行つて終つた。また長照寺へ行くのだらう。今度来た中の、書書調所で句読教授出役をやつていた赤松大三郎が、麟太郎の本蓮寺を宿としている。江戸深川冬木町八幡裏坪井信良の蘭学塾の出身で、御徒士組の出だが蘭語がよく出来るので、着早々、カッテンデーキ大尉の氣に入つた。

「あ奴あ、どうも虫が好かねえ。おれあ、あ奴の面を見ただけで氣持が悪くなる故、先生へ頼んでもう、江戸へかえらして貰うよ」

佐藤が居間で、窓の外の、秋の深くなって来た遠い山を見ながらそういつた。

「あ奴を見るからいけないのですよ。あ奴を見ないで、わたしは、あ奴の学問だけを見ているんです」

大三郎がそういう。そんなうまい訳には行かないよ。あ

奴は前のベルスライケン大尉とは、天と地程に違つてい
る、いやな野郎だ。

*

カッテンデーキ大尉に対する伝習生の感情は、佐藤だけがこういつているのではなかった。真面目そのもののよう
な中島三郎助までが、あ奴はわれわれ日本人を馬鹿にして
いる、教官故、黙つて辛抱しているのだ。みんなが、そん
な口吻をもらしているのが、麟太郎ばかりではなく、木村
さんの耳にも入つた。

木村さんは、自室で、勝さん困りましたな、といつた。
麟太郎は、へらへら笑つて、なあに、ほつたらかして置け
あいんですよ。人間だ、いろいろな奴がいますよ、教
官は誰も彼も、ベルスライケンさんのようには行かない、
あんないい人は滅多にないんですからね。

土曜日はいつも稲佐の馬場で、騎兵術の訓練がある。今
日は、カッテンデーキも馬場へ来て、馬であの辺の村々を
遠乗りするそうだ。伝習所で、そんな噂をしている人達の
顔つきが、どうも少し妙だ、麟太郎は、顎を撫でて、ふふ
んと笑つた。

「おい小笠原」

と、騎兵衛生の鐘次郎の肩を叩いて、

「カッテンデーキさんには、おとなしい馬を上げろよ」

その日の午後。稲佐の馬場は、いや、大そうな人だ。いつも、こんなところに顔も出さない伝習生の誰彼までが、あっちこちに腰を下ろして、晩秋の陽をうけて、なにかを待っている。

騎兵教官のペセンテールと共に、小笠原、倉橋、久保が、如何にも精神^{せいかん}そうな馬を飛ばして、馬場中を駆廻^{くわい}っている。その久保が、ときどき、馬を下りて、佐藤与之助のところへやって来て、こそこそと耳打をしては、また飛出して行く。

伴だの、赤松だの中島は、他の人達から少し離れていたが、佐藤は、中島のところへ行つて、来ねえね。四辺を見廻しながらいった。伴がそれをきいて、来ねえ方がいいだろう。佐藤は、ちらりとそれを見て、伴さんはあ奴の味方ですかえ、といった。

「味方じゃあねえが、おれには、もっと面白い手があるよ」

「なんですよ、それは」

「まあ云わぬが花だよ。戦さにも一陣二陣というのがあるからな」

勿体ぶりますね。そういった時だ。誰かが、来た来た、来やがつたよ、と小さな声をあげた。え、ああれ勝さんが一緒じゃあねえか、誰やらが、すぐにそういった。

如何にも、大尉と並んでこっちへ来るは麟太郎だ。佐藤は閉口した。どうにも悪い对手が来た。

「総出だね」

麟太郎は、みんなを見ると大きな声で笑いながらそういつた。

「丁度いい。佐藤、おいらお前へ馬を教えてやる」

「え」

大尉は、みんなの礼を軽ろく受け流してペセンテール教官の方へ行つて終つた。

「佐藤ばかりじゃあねえ、今日はみんな馬へのれ」

*

佐藤は慄い上つた。とんと馬は下手糞なのだ。わたしは駄目です、今日は見学に来たのですから。

武士が馬は駄目はねえだろう、駄目なら駄目でちよいとでものは、百日の見学に勝るのだ。麟太郎はにやにやしながら、云いつけて、すぐく櫛^{うし}の立つたのを二頭厩^{うまど}小者に曳出させると、裸馬のまま、自分で一頭の轡をとつてさあ乗れ、と佐藤を見た。

先生馬具は、と佐藤が眼をばちばちするを、下手は馬具、をつけぬものだ。さ、乗れ、さあ乗れ。

みんな佐藤を見たが、流石に、気の毒そうに下を向いた。とんだ時にとんだ人にとつかまつたものだ。

佐藤は、やっと乗った。乗ったと思うと、さ、しつかりするのだ、と声と共に、自分は、ちゃんと馬具のある一頭へのって、鞭を上げると、びしっと、うしろから佐藤の馬の尻を打った。

馬は一度、竿のように立つたが、危うくその首根っこへ引つつかまತ್ತ佐藤をのせて、今度は、凄いい勢いで駆出した。

「せ、せ、先生、これあいけません、これあいけません」
麟太郎は、駆寄せては、佐藤の馬の尻を打った。佐藤はもう夢中だ。いつの間にか、馬場を出て、横瀬の川つぶち迄行くと、ここから川へ沿って北へ上った。

佐藤は、死物狂いで、つかまっているが、麟太郎へ文句をつけるも、託をいうも、今はそれどころではない。びしっ、びしっ、うしろの鞭の音が、命へ針をさし込むように思われた。

田へ出た。その田畝道を行くと、今度は秋枯れの畑へ出た。

「手を放せ」

うしろから麟太郎の声がした。

「お、お、落ちます」

「落ちるのだ。馬鹿が——馬を落ちれば地べただ。地べたは動かねえがわからぬか」

そうだ、落ちりゃいいのだ。乗っているから危ないが、落ちて終えばもう安心だ。佐藤は、はじめて気がついて、思い切って手を放した。少し茶がかった草っ原へ、どーんと落ちたが、別に何処を打ったというでもなかった。

「恐かったら馬を落ちるせえ気がつかねえかえ。え、佐藤」

麟太郎も、もう馬を下りて、傍らに立っていた。佐藤の馬は、二間余りも先に止まって、もう、知らぬ顔で、悠々と草を食っている。

佐藤は、そこへ坐ったまま、無言で麟太郎を見ていた。腹が立つて腹が立つて、いきなり、むしゃぶりついて行きたい気もするし、やっと、これで命は助かったと思うような、ほっとした気もするし——。

麟太郎は、草原へでーんと仰向けに倒れて、晩秋の陽を、少し汗ばんだ顔へ受けて、おい、カッテンデーキは海軍だが、馬がべら棒に上手だ、おいらもう二度も一緒に乗って知っている、小笠原や久保や倉橋で、あ奴をいじめようとて、どうなるものかよ、お前ら、とんだ量見違えよ、苛める気が苛められて、いつそう阿呆にされるところだ。もつといい智慧は浮かばねえか、え。

*

おいらも、あ奴あ奴にさわっているが、おいらの子、お

これらの孫たちのために、じつと辛抱しているんだ。今、おれ達が、こうした苦しい籤を引いて我慢をしてやらなくちゃあ、おいらの子や孫が可哀そうだ。世界に立遅れてこの日本国、この神国が亡びて終う。佐藤、お前ら、みんな、とくに、こ奴がわかつている筈じゃあねえか。え、今のカッテンデーキのあの高慢の鼻っ先きが、あ奴の子や孫に伝わって、それをおれ達の子や孫が、いやっという程にへし折ってくれるは、今おれ達がこの辛抱をするか、しねえかで定まるのだ。百年待て、おれ達のこの口惜しさを、きつと、子や孫がけえして呉れる。今、あ奴を馬から落してへどを吐かせて見たところでほんの子供のいたずらも同じだ。え、佐藤、どうだ、そんな事よりあ、お前、おいらと一緒に草葉の蔭から、肩を組んで、百年後の子や孫の凛々しい姿を見るが楽しみとは思わねえか。

麟太郎は、いつになくしんみりしていた。佐藤は、なんぼなんでも余りだと、たった今迄の恨みの心も、霧のように風に消されて、は、は、わかりました、わかりました先生。思わず手について終った。

二人は、小半刻もそこにいた。汗ばんだからだに、晩秋の冷たさを感じたが、佐藤は、麟太郎とこうしている事に、堪らない力強いものを感じたし、麟太郎もいかに自分の塾生というものの、立派な荘内の家中が、自分如きに、

こんな風にされても、少しも腹も立てずに、従順にしてくれるが、ほんとうにうれしかった。

佐藤は、馬から落ちまいとして、どんなに両股へ力を入れたのか、さあ、もう戻ろうといわれた時に、馬へ乗ろうとしても、乗るどころか立ち上る事も出来なかった。

すっかりしろよ。麟太郎は、笑いながら背中を叩いて、抱きかかえて乗せてくれると

「その中に、おいらが、お前たちの胸をすうーとさせてやるわさ」

そういつて、轡を並べた。さわやかな風が、微かに髪を吹く。

馬場へ戻って見ると、蘭人達はまだみんないたが、伝習生は殆んど、そこに姿もなかった。伴鉄太郎が、小高いところへ立って、くすくす笑って、佐藤の戻るを迎えたし、中島は、遠くまで馳けて来た。

「中島さん、今度は、お前さん乗るかえ」

麟太郎に、そう云われて、は。と云いは云ったものの、中島も、危ないは、とくに感づいている。

「誰が、カッテンデーキを痛めつけたえ」

は。中島は、閉口してうつ向いた。伴がやって来た。

「先生に看破されたと知ると、みんな逃げて終いました」

「ほほう、お前さんはお仲間じゃあなかったかえ」